

## 研究ノート

### 古代インドの殺人鬼アングリマーラのイメージの変容

楊 柳

#### 1. 経典におけるアングリマーラ

アングリマーラ(パーリ語 *Angulimāla* : 漢訳では央掘魔羅<音訳>、指鬘<意訳>、驚崛鬘<意訳と音訳が混ぜたもの>など)は、釈迦の弟子の一人であり、釈迦が教化活動において帰依させた殺人鬼である<sup>1</sup>。

釈迦の在世中の紀元前 5、6 世紀、古代インドのコーサラ国のシュラーヴァスティー(舍衛城)には、アングリマーラという凶賊がおり、999 人(経典によりあるいは 99 人)を殺害し、一人一人から一本の指(アングリ)を斬り取って紐に通して飾り(マーラ)を作って身につけていたという。あと一本という時に釈迦に遭遇し、残る一本をその釈迦の指によって満たそうとしたが、逆に釈迦のわずかに一度の説諭によって改悛したという。そして釈迦の弟子となり、阿羅漢として尊崇される存在にまでなり、多くの伝承を生むこととなった。

アングリマーラの伝承は様々な経典に説かれている。パーリ三蔵には、アングリマーラに関するテキストは 2 つ残されている。『長老偈』(*Thera-gāthā*) 第 866~891 偈<sup>2</sup>と、『中部』(*Majjima-Nikāya*) 第 86 経<sup>3</sup>である。サンスクリット原典は見出されてないが、漢訳経典とチベット語訳が残っている。漢訳経典目録におけるアングリマーラ関係経典は次の数十部である<sup>4</sup>。

『央掘魔羅經』四卷(道場寺訳出)、『央掘魔羅經』四卷(宋元嘉年沙門求那跋陀羅於揚州訳)、抄『央掘魔羅經』二卷、『央掘摩羅經』四卷七十八紙、抄『央掘摩羅經』二卷、『央掘摩羅經』四卷、『央掘魔羅經』一部四卷(沙門僧伽跋摩。道場寺出見道慧僧祐法上等録高僧伝云於荊州辛寺出)、『央掘摩羅經』一部四卷九十二紙、『央掘摩羅經』二卷(亦直云央掘經與真經名同中有央掘摩羅經二卷疑此經是蕭子良抄撰)、抄『央掘摩羅經』

二卷、『鶡掘魔經』一卷(一名指鬘經或鶡掘魔羅經見道真錄)、『鶡掘魔經』(竺法護出鶡掘魔經一卷求那跋陀羅出鶡掘魔羅經四卷)、抄『鶡掘魔羅經』二卷、『鶡掘摩羅經』一卷(一名指鬘經一名鶡掘髻經。晉武帝竺法護訳。出長房録)、『鶡掘摩經』一卷(或作魔字或云指髻經或云指鬘經出增一阿含第三十一異訳見道真僧祐)、『鶡掘摩經』一卷(或有作魔字或云指鬘經或作指髻經六紙。西晉竺法護訳)、抄『央掘魔羅焔化經』一卷、『央掘魔羅焔化經』一卷(一名央掘摩婦死經。並西晉惠帝法炬法立訳。出長房録)、『鶡掘魔焔化經』(出鶡掘魔羅經)、『仏降央掘魔羅人民歡喜經』一卷、抄『仏降央掘魔羅人民歡喜經』一卷(沙門求那跋陀羅)、『仏降央掘魔羅人民歡喜經』一卷、『仏降鶡掘魔羅人民歡喜經』一卷(沙門求那跋陀羅)、『仏降鶡掘魔羅人民歡喜經』(出鶡掘魔羅經)、『央掘魔羅悔過經』一卷、抄『央掘魔悔過法經』一卷、『鶡掘魔悔過經』一卷(道安云竺法護所出。出僧祐録)、『帝釈施央掘魔羅法服經』一卷、『帝釈施央掘魔羅法服經』一卷、『帝釈央掘魔羅法服經』一卷(道安云晉代竺法護所出。出僧祐録)、『帝釈施央掘魔羅法服經』一卷、『鶡掘髻經』一卷、『鶡掘髻經』一卷(一名指髻經。晉世竺法護別訳)、『鶡掘髻經』一卷(沙門白遠。與竺法護指髻經大同小異出增加一阿含第三十一異訳見長房録)、『鶡掘髻經』(五指一名指髻經。沙門求那跋陀羅)、『鶡掘髻經』一卷(西晉沙門釈法炬訳)、『鶡掘鬘經』一卷(第二訳云與法護指鬘同本異訳。西晉惠帝代法炬法立訳。出長房録)、『央掘魔羅母因縁經』一卷(抄第一卷新編上)、『仏説央掘魔羅母因縁經』一卷、『鶡掘魔母因縁經』一卷(抄)、『仏説鶡掘魔羅母因縁經』一卷(道安云晉代竺法護所出。出僧祐録)、『無量楽国土經』一卷、『鶡掘魔婦死經』一卷(或云婦化經。沙門求那跋陀羅)、『指鬘經』(或作指髻經。東晉耆多蜜訳。出長房録)、『指鬘經』一卷(沙門釈法顕。或作指髻出增一阿含第三十一異訳見長房録)、『波斯匿王欲伐央掘魔羅經』一卷(祐録云抄新編上)、『波斯匿王欲伐鶡掘魔羅經』(一卷)、『波斯匿王欲伐鶡掘魔羅經』(出鶡掘魔羅經)、『有称十方仏名得多福經』一卷(祐録云抄陳録云抄央掘經第三卷新編上)、『央掘魔羅母下』八部八卷(出央掘魔羅經)。

アングリマーラ伝承を収録する現存の漢訳とチベット語訳主要經典群を整理したのが表 1 である<sup>5</sup>。アングリマーラに関わる諸經典の内容を清水俊

番号	分類	經典	訳僧	年代	収録
①	漢訳	『六度集經』	康居国沙門康僧会	吳	T3、No.152、22b-24a
②	漢訳	『仏説鶡掘摩經』	月氏国三藏・竺法護	西晋	T2、No.118、508b-510b
③	漢訳	『仏説鶡崛髻經』	沙門法炬	西晋	T2、No.119、510b-512b
④	漢訳	『増一阿含經』	罽賓三藏瞿曇僧伽提婆	東晋	T2、No.125、719b-722c
⑤	漢訳	『別訳雜阿含經』	失訳人名今附秦錄	350— 431	T2、No.100、378b-379a
⑥	漢訳	『雜阿含經』	天竺三藏求那跋陀羅	劉宋	T2、No.99、280c-281c
⑦	漢訳	『央掘魔羅經』	天竺三藏求那跋陀羅	劉宋	T2、No.120、512b-544b
⑧	漢訳	『賢愚經』	涼州沙門慧覺等	元魏	T4、No.202、423b-427c
⑨	漢訳	『出曜經』	涼州沙門竺仏念	姚秦	T4、No.212、704a-704c
⑩	チベ ット 語訳	『聖なるアングリマーラ（を利益する）と名 付ける大乘の經典』 <sup>1</sup>		18 世 紀	大谷大学所蔵『北京版西 藏大藏經』No.879、東北 大学所蔵デルグ版『東北 目録』No.213

表 1

史の整理を勘案してまとめると、

プロ ット 番号	パー リ経 典	『六 度集 経』	『仏説 鶡掘摩 経』	『仏説 鶡掘髻 経』	『増一 阿含 経』	『別訳 雑阿含 経』	『雑 阿含 経』	『央掘 魔羅 経』	『賢 愚 経』	『出 曜 経』
①		○						○	○	○
②		○	○					○	○	○
③		○	○		○			○	○	○
④		○	○		○			○	○	○
⑤	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧	○	○	○	○	○				○	○
⑨	○	○	○	○	○				○	○
⑩	○	○	○	○	○				○	○
⑪	○	○	○	○	○	○	○		○	○
⑫	○		○	○	○					○
⑬	○			○						
⑭	○		○	○	○	○	○			

表 2

- ① 出産因縁物語
- ② 師の妻に誘惑される(他の弟子に嫉妬される)
- ③ 師に教唆されて人を殺し、指を集める
- ② 母を殺して不足分を補おうとする
- ③ 釈迦が現われ、釈迦を殺そうと襲いかかる
- ⑥ 釈迦が神通力をアングリマーラに示現する
- ⑦ その結果、アングリマーラは出家する
- ⑧ 舎衛国のパセナディ王と会う
- ⑨ 女が難産に苦しむ
- ⑩ アングリマーラの誓言により、女は安産する
- ⑪ 精進して、阿羅漢果をえる

⑫ アングリマーラは城内で迫害され、苦受を受く。

⑬ 釈迦に「地獄で受けるはずの業の異熟を、現世で受けている」と説法される

⑭ アングリマーラが回顧録的な偈を唱える。

となる<sup>6</sup>。これを示したのが、表2である<sup>7</sup>。

## 2. ガンダーラレリーフにおけるアングリマーラ

ガンダーラ<sup>8</sup>地方は、「インドへの門」と呼ばれ、多くの諸民族の興亡の舞台となったが、西方、西北や南東地域から様々な文化も流入した。また仏教教団が発達し、仏教の教えが浸透してくると、法施によって衆生を導く出家者と、財施によって教団を支える在家者の関係が強く結ばれるようになった。そして仏教の民衆化に呼応して衆生を導く分かりやすい教え(方便)とともに、具象的な仏教図像が民衆の欲求に即応して発展した。それを代表するのがガンダーラ仏教美術であり、ギリシア人の文化が東方深く入り込んできたヘレニズム文化の影響が濃いものである。このガンダーラ仏教美術の年代について今定説はないが、その始まりは紀元後1世紀ごろからと考えられることが多い。その仏教美術の特性の一つは、釈迦を中心とする伝記をレリーフとして表現し、そのなかに釈迦の肖像を重ねたことである。インド古代初期における仏教美術にあって最も好まれた題材は、仏伝や説話であった。そのなかには、アングリマーラ伝承を描くレリーフは少なくない。

図1から図7は、ガンダーラにおけるアングリマーラの悔悛を主題とするレリーフである。これらレリーフの多くには、食事を携えてきた母親に斬りかかろうとする場面や釈迦へ斬りかかろうとする場面、また悔悛し剣と指鬘を投げ出して額を地につけて釈迦の足元にひれ伏す場面、そしてその一つの場面だけでなく2、3の場面を同時に表現している(同時異時限技法)。指を冠のようにして頭の被りものとし、また母親が食物らしきものを持っているという特色が、ほぼ共通して見られる<sup>9</sup>。

またガンダーラのアングリマーラ伝承のレリーフにあっては、釈迦、アングリマーラ、母親の外にも、花綱を持って飛んでいる童子や合掌する人々が見られるが、それは釈迦の偉大さとアングリマーラの教化を賛える仏弟子や

神々であろう。図 1 のように単にアングリマーラ教化の場面を描き出すものから、図 6、7 のようにアングリマーラが帰依する最終場面までを 3 つの動作によって示めそうとするものもあることから、伝承の展開をトレースしようとする意図が読み取れよう<sup>10</sup>。

そこでガンダーラレリーフにおけるアングリマーラ伝承図の構成要素と諸經典の記述内容との対応を示すため、先に整理した諸經典のプロットを振り返ってみよう。

プロットの③、④、⑤の場面を含む經典は『六度集經』、『仏說鶡掘摩經』、『増一阿含經』、『央掘魔羅經』、『賢愚經』、『出曜經』の 6 部である。それぞれの記述を提示してみよう。『六度集經』では「爾殺百人，斬取其指，今獲神仙」（なんじは百人を殺し、その指を斬り取り、今神仙を獲る）と見えるが、指鬘のことは言及がない。『仏說鶡掘摩經』では「各貫一指以鬘其額」（各一本の指を貫いで、それを以って額に鬘となす）という言葉がある。『賢愚經』では「以為鬘飾」（それを以って鬘の飾りとなす）、『増一阿含經』では「能取千人殺，以指作鬘者，果其所願」（よく千人を取って殺し、その指を鬘と作すものは、その願う所を果たす）、『出曜經』では「而取一指如是成鬘」（一本の指を取ってこれを鬘の如く成す）とあるが、体のどの部位に着けるかについては、語っていない。『央掘魔羅經』では「殺千人已取指作鬘冠首而還」（千人を殺し已に指を取って鬘と作し、首に冠して還る）のように、首にかけるものと述べている。従って、ガンダーラ伝承のレリーフの完成形、すなわち 3 要素を満たす現存漢訳經典は、『仏說鶡掘摩經』が、最も近いと言ってよからう。

しかしアングリマーラ伝承のレリーフを制作するとき、単一の經典あるいは一つの口伝だけを典拠とするだけではなく、多様の經典の記述内容を付け加える可能性がないとはいえない。なお、諸漢訳經典が対応するサンスクリット原典は現存せず、漢訳『仏說鶡掘摩經』に類似が多いとはいえ、ガンダーラにおけるアングリマーラ伝承図の典拠であると断定することは難しい。ただ現存のパリー經典『長老偈』第 866～891 偈と『中部』(Majjima-Nikāya) 第 86 經には、指鬘、母親の登場に関わる記述がないため、ガンダーラにおけるアングリマーラ伝承図の典拠がパリー經典ではなく、何らかの口伝あるい



图 1<sup>11</sup>. Gray schist, h. 36cm, w. 40cm Private collection Europe



图 2. Gray schist Mr. Sherrier London



図 3. Gray schist, h.12cm Private collection Japan



図 4. Gray schist, h.26.7cm, w.38.7cm Lahore Museum



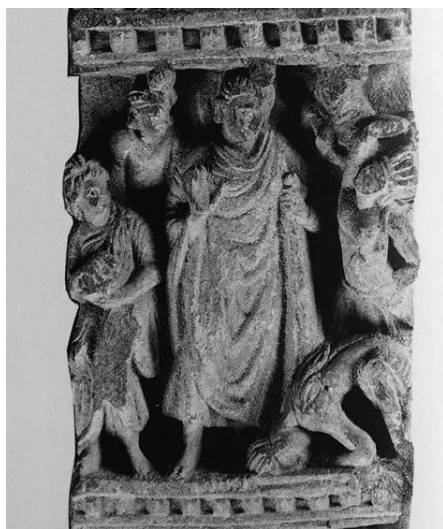


图 5. Gray schist, h. 46cm Private collection Europe



图 6. Gray schist, h. 40.6cm Peshawar Museum



図 7. Gray schist, h. 37cm Mr. Sherrier, London

は何らかのサンスクリット經典であったかもしれない。また現存漢訳經典とも対応しないサンスクリット原典があったかもしれず、詳細は分からない。

### 3. 新疆キジル石窟壁画に見えるアングリマーラ

古インドの仏教が伝播するルートには、大まかに言えば2つがあったと見なされる。それは北伝仏教と南伝仏教と呼ばれてきた。北伝仏教はパミールを越えて中国の西方域の西域(今の新疆地域)に入り、敦煌より中国に入る。

キジル石窟<sup>12</sup>が造営されたのは、亀茲国時代(1世紀～7世紀初葉)である。仏教がいつ西域の天山山脈南麓の亀茲(クチャ)に伝わってきたのかを明示する記録はないが、3世紀末葉から4世紀初葉にかけて、中国で訳経活動に従事した亀茲出身の仏僧はすでに現われていた<sup>13</sup>。その彼らは西域の言語やサンスクリットから訳出を行ったのである。当時の亀茲国の仏教美術には、外来文明との出会いの跡がはっきり見え、ガンダーラ美術の影響を受けたものが多い。当地の亀茲の石窟群のなかにあっても、造営年代が最も古く規模も大きいのは、キジル石窟群である。仏教思想の表現も最も豊かである。キジ

ル石窟群のその壁画には、ガンダーラ美術と関連する古い様式のもの、当地で展開した独自の様式のものも見られる。

そのキジル石窟には、筆者の知る限りではアングリマール伝承題材を求めたと推察される壁画6点を見出すことができよう(図8～13)。



図 8<sup>14</sup>. 仏伝図 キジル石窟第 84 窟主室正壁

ドイツベルリン国立インド美術館

これらキジル石窟の壁画は、亀茲仏教の歴史背景、絵画の様式、題材内容、洞窟の形式などの視点から総合的に分析し、また C14 の測定値を参考にすれば、第 84 窟(図 8)、32 窟(図 12)、171 窟(図 13)はキジル石窟発展期いわゆる 4 世紀中葉から 5 世紀末葉まで、第 80 窟(図 10)は繁栄期の 6 世紀から 7 世紀までと見なされている<sup>15</sup>。第 163 窟(図 9)と 175 窟(図 11)の年代は明らかになっていない。

まず、全てのアングリマールの髪飾りの描き方が曖昧で、指鬘とは簡単に判断できない。第 84 窟(図 8)の壁画には、人物の描き方とイメージからヘレニズム美術やガンダーラの影響がはっきりとうかがえる。光背のなかに仏身に欠落があるのが釈迦で、その周りに立っているのが仏弟子と神々である。

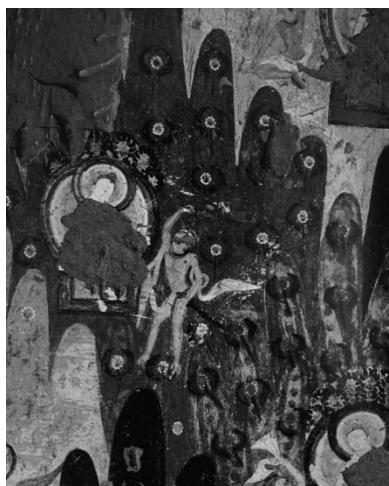


图 9<sup>16</sup>. 第 163 窟 主室券顶右侧

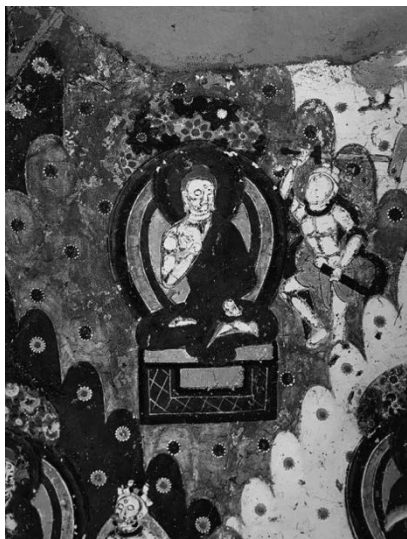


图 10. 第 80 窟 主室券顶左侧



图 11. 第 175 窟 主室券顶右侧

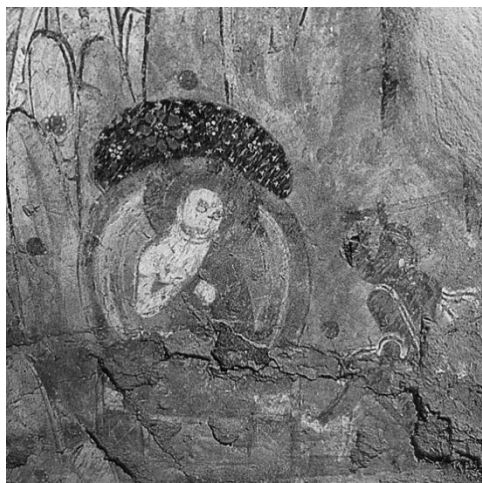


图 12. 第 32 窟主室券顶左侧



図 13. 第 171 窟主室頂全景

釈迦の足元にひれ伏す人、剣を挙げて釈迦へ斬りかかろうとする人がある。ここは、ガンダーラレリーフと同様の同時異時限の表現を継承するものと見られ、剣を持っている人もひれ伏す人もアングリマーラと見られる。両者の衣装と髪型が相違するが、髪飾りを捨てたり衣装の色が変わったりする変化で、この人物が帰依することを象徴していると考えてよかろう。また場面の左側に跪いて何かを捧げる様相は、アングリマーラ関係經典のなかに対応する場面記述がない。第 32 窟(図 12)、第 80 窟(図 10)、第 163 窟(図 9)、第 171 窟(図 13)のアングリマーラの壁画内容は、いずれもシンプルで、釈迦に斬りかかろうとする姿だけある。壁画画面から判断すれば、アングリマーラは釈迦の左側(画面の右側)でほぼ同じ姿勢で、また斬りかかろうとし、服装も筋肉の描き方も極めて類似している。第 175 窟(図 11)は今述べた 4 つの壁画と異なるところは、釈迦へ斬りかかろうとするアングリマーラの反対側、つまり画面の左側にもう一人が立っていることである。

第 32 窟(図 12)、80 窟(図 10)、163 窟(図 9)、171 窟(図 13)と、175 窟(図 11)の壁画は、いずれも仏伝図の一部として石窟主室の頂の左右の菱形図形のなかにある。『西域美術全集-亀茲・キジル石窟壁画』によれば、第 32



窟から第 175 窟までの 5 窟の壁画の仏伝図についてを、第 32 窟(図 12)には「陶輪師以蘇蜜施仏」、「印度水牛昇天」、「采花供養得昇天」、「小兒散花供養仏」など、第 80 窟(図 10)には「陶輪師以蘇蜜施仏」、「小兒散花供養仏」、「王女牟尼施灯」、「猿猴被肢喻」、「女人誤系児入井」、「龍王守護」、「弗那施仏鉢食獲現報」、「戰庶婆羅門女謗仏」、「五百商客入海采宝」など、第 163 窟(図 9)には「王女牟尼施灯」、「印度水牛昇天」などがあり、第 171 窟(図 13)には「王女牟尼施灯」、「女人誤系児入井」などとしている。第 175 窟(図 11)の壁画の周辺が剥落ちて判断しにくい。これら一連の仏伝図には他の誰かが剣を持つ場面がなく、この剣を持っている人は同一人物と見なし、アングリマーラと比定してもよからう<sup>17</sup>。また第 175 窟(図 11)の壁画に、画面の左側にはもう一人が描かれているが、それは仏弟子であると考え。この石窟の主室左壁にも菱形に描かれた仏伝図があり、ほぼ全ての図形には釈迦の両側に人物が立っており、その釈迦に向かう人物のなかの多数は同じように描かれている僧形の仏弟子である。アングリマーラ反対側の人物は比丘尼のようである。それはまるでパターン化した描き方のようである。第 84 窟(図 8)に描かれた人物のイメージと比べると、第 32 窟から 175 窟までの 5 つの石窟の壁画は当地域の西域の様式で、ヘレニズムの匂いが薄れていることが解る。従って、アングリマーラ伝承の図像表現は、西域に入ってから指鬘を示す表現が希薄となり、母親の姿が完全に消えていくのが特色のようである。

ここでガンダーラのレリーフ、キジル石窟のアングリマーラについてまとめて表 3 にしておく。これより見るに諸アングリマーラ伝承のレリーフ、壁画の著しい特性は指鬘と母親の登場の有無といえよう。ガンダーラのレリーフには確かに指鬘が表現されているが、その影響を受けているキジル石窟は、なぜ指鬘の表現を弱くしたのであろうか。キジルの第 84 窟(図 8)の画面はまだヘレニズムの雰囲気の確認されることはすでに指摘した。しかし、第 32 窟(図 12)、80 窟(図 10)、163 窟(図 9)、171 窟(図 13)と 175 窟(図 11)に描かれた人物の顔と衣装は内陸アジア当地の様式に変容した。描き方も、第 84 窟(図 8)はガンダーラのレリーフのように同じ画面で複数の場面を表わす同時異時限技法を継承した。第 32 窟から 175 窟までは一つの場面とし

	時代	一つの画面に 複数場面	母親の登場	指鬘
図 1. ガン	1 世紀頃-5 世紀頃		●	●
図 2. ガン		●	●	●
図 3. ガン		●	●	●
図 4. ガン		●	●	●
図 5. ガン		●	●	●
図 6. ガン		●	●	●
図 7. ガン		●	●	●
図 8. キ 84 窟	4C 中-5C 末	●		不明
図 9. キ 163 窟	不明			不明
図 10. キ 80 窟	6C-7C			不明
図 11. キ 175 窟	不明			不明
図 12. キ 32 窟	4C 中-5C 末			
図 13. キ 171 窟	4C 中-5C 末			

表 3

でガンダーラとの相違を見せた。それは指鬘の表現方法もガンダーラのレリーフのようにしなかったことも共通しているかもしれない。というのもこれらの壁画が『仏説鶡峴髻經』『別訳雜阿含經』『雜阿含經』のような漢訳經典を典拠としているからである。指鬘を描かなくて済んでしまうことを附加しておこう。これ以外に私が最も注目するのが西域に入ってから母親が登場しなくなることである。ここにはおそらくは漢文化の影響が強く関わっている。中国全漢期に西域都護府が設置される前に、龜茲をはじめ西域の諸国はほとんどが匈奴の支配下にあった。神爵 2 年(紀元前 60 年)、漢が烏壘(今の輪台)において西域都護府を設置し、龜茲が漢に属するようになったのはそれ以後である。そして後漢末になると、漢の勢力が次第に西域地区から後退し、龜茲は自立して仏教文化の栄える仏教王国となった。従って龜茲の前漢



と後漢時期には漢文化の影響を受けていたと言ってもよからう。漢の時代は儒家の思想が主流であり、儒家が唱える孝道が高く評価され実行されていたことはいまでもない。極めて雑駁な推論にすぎないとしてもこうした前提は崩してはならないと思われる。今は第 84 窟画面左側に跪いて何かを捧げている人物を振り返って、同時代の別壁画を参考すれば、女性上半身を裸とすることはなく、百歩譲って裸としても豊満な胸で表現するのが限度である。そして儒家が唱える孝道から考えてみれば、母親のイメージを裸で表現することはあり得ない。従ってこの場面はアングリマーラ説話であるとしても女性としての母親を描かないことが特色となっている。このような漢文化の影響下の母殺しなどは許容できるテーマではない。

## 5. 結論

アングリマーラの人間像について、初期の関係経典では、アングリマーラは冷血殺人鬼であり、釈迦に止められて帰依して阿羅漢になったと記している。便利な紙で容易に記録することができない時代に、口伝や注釈の自由さが逆に加わって、仏教教団の発展とともにアングリマーラ伝承も発展したのであろう。そしてその後のアングリマーラのイメージは、その出身が良く、善の真性を備える人物へと変容をたどりながら、その反面、天界に生まれ変わるためにはバラモンの師匠の指示に忠実にしたがって母親でさえも加害し、その指を切り取って鬘を作ろうとするほどの殺人鬼として描かれるようになった。そしてさらにそのような極悪のアングリマーラが一転して、釈迦のわずかに一度の教化によって帰依していただくだけではなく、阿羅漢にさえなったのである。ガンダーラ期のレリーフにあっては、アングリマーラは殺した人の指を切り取って指の冠・指鬘を頭にかぶり、母親と釈迦を殺そうとする実に非道な様相で表現されるが、西域の亀茲のキジル石窟の壁画にあっては、指鬘の表現が曖昧となり、母親を殺すどころかその母親が登場しなくなる。インドのアングリマーラ伝承とは明らかに相違する大きな変容が起こったのである。それは、仏教が伝来していった当地の文化のあり方と深い関係があるように思える。私はそれを、仮説の域を出ないとは承知しながらも、漢文化の波及と想定したのである。

なお著名な敦煌の莫高窟石窟群<sup>18</sup>の壁画にも、アングリマーラを主題とする壁画は見られる。しかし現時点で確認されているのは晩唐の第98窟<sup>19</sup>と五代の第146窟<sup>20</sup>の2点だけである。筆者の知る限りキジル石窟のアングリマーラ伝承図とはずいぶんと時も隔たり、その内容も『賢愚経』の「無悩指鬘品」を背景とするものである。しかも『賢愚経』の「無悩指鬘品」の中心はアングリマーラ伝承ではなく、国王ブラセーナジットに、釈迦が説いた過去世に須陀素弥王(過去世の釈迦)に説諭された駸足王(過去世のアングリマーラ)の伝承である。したがって先に見たガンダーラやキジルのアングリマーラとは、ずいぶんと時が隔たっているだけでなく、その内容としても隔たりも感じざるをえない。キジル石窟に見えるようなアングリマーラ伝承が、敦煌にはなぜ見えないのであろうか、アングリマーラ伝承に係わる漢訳諸経典もまたなぜ敦煌文献からは見いだせないものであろうか。私には、不思議なことに思えるのである。こうした疑問点もまた、今後の課題として意識しておきたい。

## 注

<sup>1</sup> 本稿は、白須浄真「『歎異抄』13条の親鸞・唯円の対話と古代インドのアングリマーラ伝承：漢訳諸経典とアングリマーラ伝承との相関」と荒見泰史・桂弘「指鬘と鬘、華鬘」に強く啓発されたものである。また筆者が2019年7月20日にて広島大学で行われた国際研究集会「伝えられた声とその廻響き」で発表した未完稿の続きである。

<sup>2</sup> 日本語訳は中村元訳『仏弟子の告白ーテーラガーターー』(岩波文庫)、岩波書店、2003(1982初版)に収録。

<sup>3</sup> 「Angulimāla Sutta」、『Majjima-Nikāya』II、Pali Text Society、p97-105。その日本語訳は中村元監修『中部経典Ⅲ』原始仏典第6巻、春秋社、2005年に収録、田辺和子訳「残忍な盗賊アングリマーラの帰依ー央掘摩羅」を参照。

<sup>4</sup> 主に『大正新脩大藏経』の第五十五巻「目錄部全」に基づいてまとめておくものである。参考の目録は、「出三蔵記集」(釈僧祐撰、第55冊 No.2145)、「衆経目録」(隋沙門法經等撰、第55冊 No.2146)、「大唐内典録序」(麟徳元年甲子歳京師西明寺釈氏撰、第55冊 No.2149)、「古今訳経図紀」(大唐翻経沙門釈靖邁撰、第55冊 No.2151)、「大周刊定衆経目録」(大唐天后勅仏授記寺沙門明佺等撰、第55冊 No.2153)、「開元教録」(庚午歳西崇福寺沙門智昇撰、第55冊 No.2154)、「開元釈教録略出」(唐西崇福寺沙門智

昇撰、第 55 冊 No. 2155)、「貞元新定釈教目録」(西京西明寺沙門円照撰、第 55 冊 No. 2157)となる。

<sup>5</sup> かつての整理者白須浄真の論文を参照する。漢訳は T(大正新脩大蔵經)の番号とページで表示する。時代順に配列することに限らない。

<sup>6</sup> プロットの整理は清水俊史「パーリ上座部におけるアングリマーラ経釈義：聖典の字義と、阿毘達磨による解釈」(南アジア古典学 11、2016 年)を引用する。

<sup>7</sup> パーリ語原典『長老偈』(Thera-gāthā) 第 866-891 偈と『中部』(Majjima-Nikāya) 第 86 経の内容は大体同じからここは一つの類にする。また漢訳經典の方は、「仏本行経」(鶡掘魔)と「僧伽羅刹所集経」(鶡崛鬘)にもアングリマーラの名前出たが、「仏本行経」巻第四広度品第十九にはただ「懷害多瞋怒，捷疾甚暴風；小指為額鬘，迷惑癡狂走」のような短い偈の形で出て、また「僧伽羅刹所集経」巻下には釈迦が神通力をアングリマーラに示現するプロット以外ほぼ別の物語のようである。従ってここでこの二つの經典を列挙しないことにする。

<sup>8</sup> ガンダーラという古代の地名は、現在のペシャワールを中心とした、タキシラやスワートを含まない狭い地域とする考え方と、それらを含めなおアフガニスタンを含む広い地域と考える場合とがあるようであるが、ガンダーラ文化圏という意味では、通常後者と考えられている。

<sup>9</sup> 切り集めた指は、首飾りにすると仏典にはあるそうであるが、ガンダーラ彫刻では、指は頭の飾り冠の形になっている。

<sup>10</sup> 上原永子「ガンダーラにおけるアングリマーラ説話図について」、『密教図像』34、19-31 頁、2015 年。

<sup>11</sup> 図 1 から図 7 までの典拠は栗田功『ガンダーラ美術』、二玄社、1988 年。

<sup>12</sup> 中国新疆ウイグル自治区アクス地区バイ県キジル郷にある仏教石窟寺院の遺跡群。キジル石窟が造られたのが 3 世紀の中葉から 8 世紀の間とされる。当時は古代仏教王国の亀茲国に支配されていた。

<sup>13</sup> 後漢永元 3 年 (91)、班超は亀茲国を攻撃し、亀茲国王の尤利多を廃立させ、新しい王に白霸を立てた以来、亀茲の国王はずっと白(帛)を苗字とする。従って苗字が白或は帛の西域僧は亀茲からのものであると考えられる。例えば三国魏帛延、西晋帛尸梨蜜多羅などはその一例である。

<sup>14</sup> 図 8 から図 13 までの出所は趙莉主編『西域美術全集』7・8 亀茲・克孜爾石窟壁画、新疆文化出版社、2016 年。

<sup>15</sup> 霍旭初、王建林「丹青斑駁 千秋壯觀-克孜爾石窟壁画藝術及分期概述」、『亀茲佛教文化論集』、新疆美術攝影出版社、201-208 頁、1993 年。

<sup>16</sup> 趙莉主編『西域美術全集』の「亀茲・克孜爾石窟壁画」には、この壁画が第 80 窟と書いてあるが、163 窟と 80 窟の壁画を比較した上で、筆者はこれが誤りであると判断した。この壁画が属する洞窟は 163 窟である可能性が極めて高いと考える。

<sup>17</sup> 馬世長は「キジル石窟中心柱窟の主室窟頂と後室の壁画」（『中国石窟：キジル石窟第 2 卷』、平凡社、1984 年）で第 171 窟がアングリマーラ伝承であると指摘した。

<sup>18</sup> 中国甘肅省にある地名。その近郊にある宏大な仏教遺跡は 4 世紀から約千年間を中心に、20 世紀初に至るまで造営が続けられ、大小 492 点の石窟に彩色塑像と壁画が保存されており、仏教美術として世界最大の規模を誇る。

<sup>19</sup> 敦煌研究院編『敦煌石窟内容総録』、文物出版社、p38、1996 年。「北壁西起画天請問經变、葉師經变、華嚴經变、思益梵天問經变各一鋪；下屏風十三扇，画賢愚經变諸品，西起・・・八、九：無惱指鬘品。」

<sup>20</sup> 敦煌研究院編『敦煌石窟内容総録』、文物出版社、p57、1996 年。「北壁西起画天請問經变、葉師經变、華嚴經变、思益梵天問經变各一鋪。下賢愚經变屏風七扇，一至三：無惱指鬘品。」

## 参考文献

上原永子「ガンダーラにおけるアングリマーラ説話図について」、『密教図像』34、19-31 頁、2015 年。

鎌田茂雄『中国仏教史』、岩波書店、1986 年。

藤田豊八『東西交渉史の研究』西域篇、荻原星文館、1943 年、389-406 頁。

能仁正顕「チベットの仏伝図『釈尊絵伝』の基礎研究：多田等観請来チベット資料の調査をふまえて」、龍谷大学アジア仏教文化研究センターワーキングペーパーNo.13-4、2014 年。

田辺勝美「ガンダーラの仏教美術」、『世界美術大全集・東洋編』第 15 巻、小学館、1999 年。

梁麗玲「新疆與敦煌石窟中『賢愚經』故事画之比較」、『敦煌学』第 23 輯、p87-110、2001 年。

余太山「『魏略・西戎伝』要注」、『中国边疆史地研究』第 16 卷第 2 期、2006 年、127-145 頁。

趙莉「克孜爾石窟分期年代研究総述」、『敦煌学輯刊』1、2002 年。

趙莉主編『西域美術全集』7・8 亀茲・克孜爾石窟壁画、新疆文化出版社、2016 年。

周菁葆「糸綢之路與亀茲」、『糸綢之路』第 22 期、2011 年。